

2 浮世の画家

1 構成

四つの年代で成立している。行間を空けた箇所では段落に切る。

一九四八年十月 1段～7段

一九四九年四月 1段～4段

一九四九年十一月 1段～4段

一九五〇年六月 1段

一九四八年十月

1

時 場所 <ためらい橋> 木橋 丘の上の大きな家

事件

この家は三十年間、市で誰より尊敬されていた最高の実力者杉村明の家だった。

時 場所 十五年前

事件

私の妻道子は新しい家、地位にふさわしい家を探してくれと言っていた。杉村が死んで一年後、家は売りに出された。長女節子は十四、五才だった。

時 場所 ある日の午後

事件

杉村の娘の白髪の女性二人がやって来た。父が建てた家をそれにふさわしい人に譲る。人徳をせりに掛けると言う。父は教養人で画家を尊敬し小野の仕事のことを知っていたと言う。

時 場所 数日

事件

杉村は美術愛好家で、多くの美術展覧会を後援していた。

時 場所 売却契約成立

事件

持ち主としてふさわしいという報せが来る。小野は低い金額で手に入れることができた。

時 場所 敗戦後間もなく

事件

杉村の妹が訪ねて来て、建物がどうなったかだけ気にする。東棟の被害を見て涙を流す。

時 場所 戦災前

事件

二人の娘は縁側に座って庭を眺めたり話したりした。

時 場所 戦後

事件

縁側は最大の被害を受けた。

時 場所 一年

事件

縁側の修理は完成していた。二人の娘は昔と同じように縁側で長い時間を過ごした。

時 場所 翌日 朝食後 縁側

事件

紀子は、父は隠居してから一日中ふさぎっぱなしで世話が焼ける、節子が来てくれ少し開放されると喜ぶ。

時 場所 近代的なアパート 縁側

事件

紀子の息子一郎はこの家の広い空間を気に入っている。端から端まで猛スピードで往復する。

時 場所 縁側

事件

小野は一郎と映画の話をする。紀子が朝ごはんの片付けを手伝ってと言うと、女の仕事と答える。テーブルは重いと言うと一郎は大股で家の中へ一歩歩いて行った。

時 場所 紀子の縁談

事件

節子は進んでいると思っていたが、実際には何一つ決まっていない。

時 場所 先月

事件

小野は節子は若い頃器量が悪かった。三十になり気品が備わってきたと言う。紀子は芝居じみた態度をとっていた。破談になった時もそれらしく振舞うしかなかった。節子は、みんな笑ったが本当に恋愛だったかも知れない。三宅が急に手を引いた。

時 場所 未明

事件

三宅家から破談の申し入れがあった。理由は一人息子が一段格の高い家の娘と結婚することを快く思わないからだ。小野はそういうことは意識してはいない。

時 場所 例 高い地位

事件

マダム川上のバーで信太郎と飲んでいたら、マダムが親戚の青年が能力はあるが働き口がないとこぼした。すると信太郎が、先生が口をきいてくれば立派な職にありつけると言う。信太郎は弟にしてもらったことを覚えていたのだ。

時 場所 一九三五年か三六年

事件

信太郎は小野に推薦書を書いてもらい、弟を就職させることができた。小野の地位は高かった。が、今は引退し、縁故者もあまりない。

時 場所 数年

事件

信太郎は世間知らずで子供っぽい。本の挿絵で暮らしを立てている。世間的なことに無知だ。

時 場所 十六七年前

事件

マダムが店を出した時、たくさんの酒場、小料理店があった。

時 場所 店<みぎひだり>

事件

小野のグループが入りびたった。主催する洋画塾のエリートたち、黒田、村崎、田中だ。信太郎は一度もこのグループに加わらず、笑われていた。

弟子たちは師匠礼賛の演説をし、小野は満足した。

時 場所 敗戦後

事件

建物は立っていたが壊れていた。

時 場所 ある朝

事件

ブルードーザーはあらゆるものを押し倒している。市の復興作業は三年も続いている。

時 場所 先月 小野宅 数日前の夕方

事件

瓦礫の中から煙が昇っていた。小野は火葬の煙のように思った。

2

時 場所 先日 小野宅 縁側

事件

節子は翌日の大半を紀子と縁台で話した。小野は孫を探した。

時 場所 ピアノ部屋 ドイツ製の縦型ピアノ

事件

ついで行くと一郎がヤーヤーと言いながら跳ねている。前の晩、スケッチブックとクレヨンプレゼントしたが、クレヨン三、四本が散らばり、最後の二、三枚には絵が描いてあるらしい。誰の演技かと聞くとローン・レンジャーと答える。電車、汽車が描いてある。見ちゃだめと奪い取ろうとする。描き方を教えてやると言う、あばれるのをやめ、クレヨンを集めた。一種の魅惑の表情をした。有名な画家だったのか、日本が戦争に負けたからやめたのか尋ねる。

時 場所 電車のスケッチ

事件

一郎は家の中にある絵を小野が描いたものが尋ねる、どこにあるのか、見てみたいと言う。怪獣の絵を描く。

時 場所 五、六分後 縁側

事件

節子は一人庭を眺めている。空襲による被害も修復が進んでいる。

時 場所 風 群葉がそよいだ。

事件

小野は数年前カウボーイの映画は見られなかったと言う。明日一郎を映画に連れて行くと言うと、紀子は明日は計画が立っていると言う。

3

時 場所 茶の間 夕食後

事件

小野がみんなで映画に行くと言うと、紀子は鹿の園に行く計画があると反対する。

時 場所 ピアノの部屋

事件

小野は一郎に謝る。一郎は不機嫌そうだ。

時 場所 茶の間

事件

節子が一緒に行くか聞くと、小野は片づけておきたいことがあると答える。紀子は用事なんか無いと言う。節子も留守番に回る。小野は節子と話す機会がなかったので喜ぶ。節子には特別な理由があった。

4

時 場所 着いた翌日 午後 客間

事件

節子は花を生けた花瓶を持って入って来た。小野は隠居後、暇になり部屋を歩き回っている。

時 場所 父の家 鶴岡村 客間 汽車で半日 十二日

事件

小野は十二歳の時、家の中心の客間に始めて父に呼び入れられた。一瞬見たものをキャンバス上に再現する能力があった。

時 場所 週一回 家業の相談

事件

父は傾きかけた家業を継がせたいと、商売を教えた。小野は同意したが理解はできなかった。

時 場所 十五才 客間

事件

絵とスケッチを父のそばに置いた。残らず持って来たかと問われ、一枚か二枚ならあるかも知れないと答えるとそれこそ一番誇りにしている絵だろうと言う。

時 場所 一枚の絵

事件

父は見事な腕前だとほめる。母が絵を本職にしたがっていると言っているがそれは勘違いからと言う。昔村に来た修行僧が益次の心を見抜き戒めを残して行った話をする。

また、絵描きは不潔な貧乏暮らしをしている、母は画家の道を歩きながら誘惑に陥らない人もいると言う。

小野は父は小銭の勘定をやっている。それはじぶんにはできない。自分の野心に火をつけたのは父だと言う。

時 場所 先月 客間

事件

節子は花を生けるために客間に入ってきた。紀子の縁談が進みそうなので順番と手順を踏んだ方がいい、相手側の調査のことを言いたいと言う。紀子は二十六で、去年みたいな失望を経験させられないと言う。

5

時 場所 昨日 荒川地区まで電車

事件

節子の忠告を思い出していただたしさを覚えた。

時 場所 節子帰って来た翌日

事件

昨年思いがけず三宅夫妻が縁談打ち切りをしたことに思い当たるふしがあるのではないかと節子が尋ねた。夫の素一は満州で辛い目にあった。二人は遠くに住んでいて、会うのもせいぜい月に一度だ。

時 場所 先月

事件

二人が話に熱中しているところに小野が出くわすと、後ろめたさそうに黙り込んだ。

時 場所 数日前 朝食後

事件

紀子は、清水デパート前で三宅二郎に会った。彼はバツが悪そうな顔をしていた。婚約したと言う。結婚していると聞いて嬉しかった。なぜ結婚したか聞こうとしたがやめたと言う。小野は青年の地位がふさわしくないとやったと言うと建前だと答える。紀子はきっと美人でなくて、期待を裏切ったからと思う。

時 場所 一年余り前 縁談進行中 横手町

事件

三宅二郎に会った時、小さな事務所から狭い階段を下りて来た。くたびれたレインコートを着て、脇の下に書類カバンをはさんでいた。ぎこちなさは会社のみすぼらしさを恥じているようだった。

時 場所 一週間後

事件

三宅夫妻が辞退を言ってきた。

時 場所 その後数日

事件

小野は二郎が職場を見られ断った、あの出会いが破談のきっかけになったと思う。

時 場所 木村商会ビル前

事件

二郎は社長の死について語る。社長は戦時中の事業に責任を感じていた。戦没者の遺族に詫びてガス自殺した。小野が、死んで詫びる必要はないと言うと二郎は戦時中の地位に就いている人が大勢いると言う。

時 場所 賢治の納骨式

事件

遺骨が満州から戻って来る。一年以上かかった。地雷源での突撃を敢行して二十三名の若者と共に戦死した。

時 場所 二年前の九月 告別納骨式

事件

素一は腹立たし気に大股で歩み寄った。彼は賢治達の運命を自分のこととと思っていた。

時 場所 その他 部屋の隅

事件

小野がこういう告別式に憤慨するそうだねと言うと、素一は命が無駄に失われたことに腹が立つと言った。勇敢な若者は命を奪われ犯罪人はのうのうと生きていると批判した。とげとげしい態度をとった。

時 場所 開戦二年前

素一は節子と結婚した頃、礼儀正しい大人しい青年だった。

時 場所 先だつての晩 マダム川上の店

事件

男が平山が軍歌を歌ったり反動的スローガンをわめきつづけて叩きのめされたと言った。今軍歌や演説が気に入らなくて殴ったかも知れないが、かつてそれをそそのかした人だ。

素一も二郎もおなじとげとげしさや恨めしさにこもっている。

6

時 場所 荒川地区 住宅地

事件

市電が通じて住宅地になった。

時 場所 一九三一年 市電各線の開設

事件

市民生活に大きな影響を及ぼした。

時 場所 一九三三年三四年

事件

在郷軍人山縣は新しい歓楽街を作ろうとした。

時 場所 <みぎひだり>

事件

小野は創業に役割を演じた。名前は知られていて、人脈は豊富で教育の施策に相談に乗っていた。

新設の店を愛国精神を推進する場所にしたり、陛下への忠誠心においてゆるぎない作品を制作している多数の友人が協力すると説明した。

時 場所 新しい市電系統開始二年半後

事件

<みぎひだり>は開店した。

時 場所 一九一三年 若い頃 古川

事件

古川に住んだ。山縣屋は近くにあり、二十人余りが飲んでいて、最初に住んだのは老婦人と独りの一人息子が住んでいる家の屋根裏部屋だった。ランプの光で絵を描いた。

時 場所 武田公房

事件

雇って貰い絵描きとして暮らしが立てられた。武田公房は短期間に多数の絵画を製作した。武田会長は強い支配力を示していた。

時 場所 アトリエ（食堂の二階）

事件

夕方六時、下の食堂に客が入って来ると、退出させられた。

時 場所 一年後

事件

中原康成と言う画家が入って来た。開戦二年前に中学校美術教諭についてそのまま工房に入った。謙虚で臆病で徹底して正直に自画像を描いた。他の者が五つ六つ作品を仕上げる時、二、三点しか描けないのでカメさんとあだ名をつけられた。

時 場所 根岸地区出身

事例

カメさんはここの出身だ。ここの人は意気地なし骨なしと噂されていた。

時 場所 ある朝

事件

同僚二人がカメさんの仕事の遅いのをなじった。小野は芸術的な良心の持ち主だとかばう。小野は作品の質と量にひけをとらないから尊敬されていたのでいじめは中止された。

時 場所 武田公房の雰囲気

事件

工房の名声を維持するため、一致協力して制作している。注文に応じて描いている。輸出先の外国人に日本人らしく見えるように書いている。芸者、桜の花、池の鯉、寺院など。

時 場所 二カ月後 玉川寺境内 早春 日曜 午後

事件

散歩していたらベンチに座っているカメさんを見つけた。小野は森山誠治画伯に弟子に誘われた。工房をやめて弟子になろうと話す。一緒に行こうと誘う。カメさんは父が武田に推薦してくれ雇ってもらった。数カ月で恩知らずなことはできないと断る。

時 場所 <みぎひだり>

事件

弟子達が工房にいて芸術家に役立つことを教えるなんて信じられない、工場みたいだと批判する。小野は、大事なことを教えてくれた。時勢に押し流されるなど教えられたと話す。新しい日本精神の矛先になってくれ、この店こそその証であり、我々はそれを誇りにする資格を持っていると励ます。

時 場所 小野の家

事件

最も有能な黒田の「愛国心」という絵がある。<みぎひだり>の夜の情景を描いてある。

時 場所 最近 マダム川上のバー

事件

マダムと信太郎は道であった人とは違う人になっていると言う。マダムは常連を連れ戻すのが義務だ。みんなで先生を指導者と仰いでいたと話す。

7

時 場所 占領一年 朝 雨

事件

建物の残骸を眺めていた。無表情にわたしの方を見ている黒田の顔を認め異様な印象を受けた。戦前まんまるだった顔はこけていた。やがて向きを変え、反対の方へ歩み去った。

時 場所 先日 電車

事件

斎藤博士に会った時、黒田の名が出た。

時 場所 怪獣映画 昼食後 玄関先 電車

事件

一郎はレインコートを持って出た。いばりくさって歩き出した。

時 場所 丘を下りきったところ

事件

一郎は、有名な画家だった、絵を見せてくれと頼んでも見せてくれないと言う。小野は全部しまいこんでいると答える。電車の中で齋藤博士に会った。

時 場所 齋藤博士の長男と紀子の縁談

事件

三宅家は特にいい家柄とはいえない。齋藤家は名門だ。博士の美術界における活躍ぶりは知っている。名声を承知している。

時 場所 市電

事件

齋藤博士は隅に席をとった。双方仲人の人柄を称えた。無用の不安を感じないですむ。博士は暖かいおだやかな態度で一郎に声をかける。一郎は気を許して話す。博士は共通の知り合い黒田について話す。新設の上町大学の美術の教師として就職が決まったと博士は話す。

時 場所 目的地

事件

彼は京に期待を表明し、一礼して出口へ行く。

時 場所 映画館のすぐ前 ポスター

事件

ポスターに火はなかった。一郎はポスターに近づいてにせの怪獣 人間の作ったものと言って笑った。

時 場所 館内 怪獣映画 暗い洞窟 巨大トカゲ

事件

一郎はレインコートをかぶり、片手は小野の腕にしがみつく。小野は小声で説明する。一郎はつまらないと言う。

時 場所 帰宅 夕食

事件

一郎は映画の話に熱中する。小野は博士に会ったと話すと二人は驚いて見た。

時 場所 その晩 打撃音

事件

節子は寝つけないといつもああだと言う。紀子は怖い映画を見せられて可哀想と言う。節子は紀子はあの年で独身なんて可哀想と言う。

節子は黒田が家に来て何時間も話し込んでいたと言う。小野は昔の知り合いの家を尋ねた方がいい、齋藤家の側の人が会う前に無用の誤認が生じないようにと助言する。

時 場所 昨日 電車 荒川の松田知州の家

事件

松田の家は小野の家くらい巨大だ。四十ばかりの女が客間に通した。

時 場所 武田公房 森山誠治の別荘 三十年前

事件

カメさんと二人工房を去り、別荘に暮らし六年した頃、松田が尋ねて来て初めて会った。

時 場所 岡田信源協会

事件

松田は協会に勤めていて展覧会の件で手紙を出した。返事が意外だったので訪ねようとしたと言う。協会と関係を持ちたくないと言うのはおかしい。会いたくて来た、絵から感銘を受けた。才能があると言う。名刺を置いて行く。

時 場所 昨日

事件

松田は別人のように見え、不健康だった。

時 場所 三年前

事件

最後に会ったのは三年前だ。松田は小野と道子の仲人をした。小野はよくしてくれたと感謝する。松田は戦争はもうじき終わるといふ時に、気まぐれな焼夷弾攻撃だった。他にけが人は一人も出なかったのに残酷な話だと言う。

時 場所 庭

事件

松田は貯金、財産があり助力は惜しまないと言う。小野は財産を保ってきたと答える。小野は助力が借りたいと頼む。紀子の縁談があり、去年のつめのところで立ち消えた。その頃、紀子のことで近づいた者はいないか聞くといない、来ても追い返すと答える。最善のことしか話さないと言う。来てくれ嬉しいが来る必要は全くなかったと言う。小野は安心感を抱く。古い仲間との関係を固め直しておくことは結構なことだ。

一九四九年

1

時 場所 週三日か四日 夕方 散歩 <ためらい橋>

事件

小さな木橋を渡る。橋の上で、夜の楽しみにふけるか家に帰るか決めかねるのでこの名がついた。

時 場所 一年前 草と泥土 いま社員寮

事件

焼け跡も少しずつ姿を消している。

時 場所 数日前の晩

事件

マダム川上は高額の買収申し入れを受けた。客は減っている。

時 場所 去年 客 ある晩

事件

信太郎が新設高校の教職につくことを望み小野に保証人になってくれと頼んだ。

時 場所 新年 家

事件

信太郎は東町高校への就職は有望だと言ったが、検討の余地に過去の問題があると言った。審議会苑に釈明文を書いてほしいと頼む。

時 場所 支那事変のポスター

事件

国家存亡の危機で国家に何が必要か決定すべき時で信太郎の作品を誇りにした。彼は公然と不同意を表明した。シナ事変のポスター競作の件で審議会が納得してくれにくいと言う。

小野は過去を直視し、ポスター競作で名を上げた。今自分を偽る必要はないと言う。信太郎は会長の名前と住所を書いた紙片を置いて行くので手紙を書いてほしいと頼む。

2

時 場所 その日 紀子の見合いから二、三週間後

事件

信太郎の責任を回避しようとする努力に小野は冷淡であった。

時 場所 昨年 秋から冬

事件

斎藤太郎と紀子の縁談は順調に進んだ。

時 場所 十二月 春日パークホテル 見合い

事件

会場に不満でやや劣勢なので紀子は緊張した。

時 場所 ある日の午後

事件

庭木の手入れをしていると、帰宅した紀子が竹の切り方に文句を言う。植え込みも台無しになりそうと言う。紀子は小野の手入れに何かと文句を言い、二人は言い合いになる。

3

時 場所 黒田の経歴

事件

小野は主任教授に黒田の経歴を尋ねた。昨年夏、上町下美術選任教授の職を得た。終戦に釈放された。何年も獄中生活を強いられたがこれは名誉になった。少人数の相手の個人教授と画材を手に入れた。

時 場所 工事中 共同住宅

事件

三階まで階段を上がった。

時 場所 黒田の部屋 小さい

事件

黒田の弟子の二十才の青年が留守をしている。その円地の習作が飾られている。小野は大した才能で筆の勢いが黒田そのものと評価する。円地は心酔しているので模倣しないではいられないと答える。下宿して二週間になる。絵の具を畳に散らすので追い出された。

小野は十分な事情を知らないで事柄について早急な結論を出さないでほしいと言う。親しい相手として受け入れたかどうかは黒田が決めると言うと円地は会いたくないだろうと答える。看守は肩の傷を忘れ殴る蹴るの乱暴を繰り返した。国賊と呼んだ。誰が国賊か分かっている。裏切り者の多くが大手を振って歩いている。

小野は黒田が記憶の中のわたしに敵意を燃やしていれば困った態度と思った。

時 場所 数日後

事件

かつての弟子黒田から会っても実りある話はできる保証はないと返信が来る。これは影を落とし縁談についての見通しを暗くした。

4

時 場所 春日パークホテル

事件

窓から春日山の西側斜面に開けた眺めはよかった。太郎は知的で責任感も強そうだった。

時 場所 数日前 帝国荘

事件

節子、素一は見合いをした。素一は戦争で悲痛な体験をした。一人いい印象を受けなかったのは次男の満男だ。円地を思いだした。

時 場所 食事何分か

事件

満男は不器用で本心をさらけ出したか？齋藤家はみな同じ考えを抱いている。

ピアノ、ブラームスのレコードを話題に話がはずむ。博士がデモでけがをした男が電車に乗って来て、病院に行ってきたばかりでまたデモに戻ると答えたと話に誘う。小野は大勢の人が傷を負っているのは残念と、夫人は気が高ぶっていると言う。

時 場所 沈黙

事件

みんなの注意はわたしに向く。負傷者が出るのは残念と答える。博士は民衆が自分達の意思を表明する必要があると信じている、その信条だと言う。太郎は民主主義に伴う責任の取り方を学ぶべきと言う。博士は息子より父親の方がリベラルだと言う。齋藤家の見解の相違は波風をたてていない。

時 場所 食事が終わる頃

事件

博士は共通の知人黒田がいる上町大学の学生と満男を紹介する。満男は黒田を知らない。評判を聞くと枝群と答える。

小野はかつてのわたしが世の中に悪影響を及ぼしたと信じている者もいる。黒田はそういう見解だと言う。太郎は自分に辛く当たりすぎると言い始めた。小野は当時は信念を持っていた、国民の役に立つと思っていたが、現在は間違っていると認めると言う。太郎は自分に厳し過ぎるが紀子にこんなに厳しいかと尋ねる。紀子は厳しくない、朝食に間に合うように起きて来ないと答えると父も朝寝坊と相槌を打つ。博士は二人して我々を笑いものに行っているとと言う。

時 場所 両家の会合この時を境に順調

事件

全員がすっかり親しくなっていた。二人も互いに好意を抱いている。過ちを直視すれば満足感が得られ自尊心が高まる。

時 場所 反対の例 信太郎

事件

教員の資格を確保したらしい。過去の自分の行為を直視したらもっと幸せになれた。目的達成のため偽善的行為を続けた。ずるがしこい。

時 場所 先立っての晩 マダム川上の店

事件

小野が信太郎は人につけ入って思う通りに事を運ぶ、巧妙に戦争を逃れたと批判するとマダムは足が不自由だからと弁解する。信太郎はもう来てくれないと言う。

時 場所 市の開発会社

事例

コンクリート高層ビル建設を開始していた。昔ここは活気がある街だった。

一九四九年 十一月

1

時 場所 十六年前 今の家に移って来た翌日 夏 門柱

事件

小野が門の手入れをしていると、紳士が門柱の名前を眺めていた。この時、斎藤博士と始めて会った。彼は私立皇国大学に勤めており、小野は有名な画家で名前は知り合っていた。

時 場所 今年の節分の里帰り 数日

事件

朝、節子と川辺公園を散歩した。

時 場所 川辺公園

事件

二十数年前、その死後小野が家屋敷を買うことになった杉村明が川辺公園改造計画を立てた。

時 場所 一九二十年が二十一年

事件

杉村は蓄財と資本の大半を賭けて事業を興した。自然緑地を増やし文化施設を集中させるものだった。工事が進んだ段階で計画は財政難に陥った。杉村は巨額の金を失い、影響力を失った。

時 場所 終戦後

事件

川辺公園は市当局の管理になった。小野は杉村邸を購入した。

時 場所 山口市長銅像

事件

節子、紀子、一郎と会った。紀子は派手な服装をし、一郎は天才だった。

時 場所 デパート 昼食

事件

一郎はホンレソウを食べれば強くなると言った。一郎と会うのは一年余りになる。賢治の天才の頃を思い出す。

時 場所 森山家別荘

事件

旧師森山誠治と過ごした七年間は重要な部分の一つだ。別荘は美しい光景を示しているが荒れていた。モリさんは絵を描き上げると十人の弟子を一室に呼び集め、作品の特徴を指摘し合わせた。あまりの見事さに息をのんだ。作品は革新的な技術を示していた。

時 場所 別荘生活

事件

佐々木は一番弟子でモリさんはその意見を尊重した。カメさんは数か月の間に何度も作品を廃棄していた。師匠の主義に背く要素を感じさせる作品を製作しつづけた。

時 場所 「現代の歌麿」

モリさんは「現代の歌麿」と呼ばれていた。遊女や芸者の絵を得意とする画家に使われた言葉だ。歌麿の伝統を現代化しようと意識的に努力していた。念願は女達のまわりに愁いを帯びた夜の雰囲気醸し出すことだった。

カメさんは一年たっても見当違いの効果しか生まれない色を使っていた。裏切り者と非難されるのではと悩んでいた。

時 場所 画の雰囲気

事件

武田公房とおなじように増悪が芽生える。

時 場所 二年目

事件

リーダーは能力が優れているので、師匠の作品の短所を見抜き自分の見解を編み出す。

佐々木はモリさんと言いつつ、そして去って行った。仲間からの暗い増悪を浴びた。寂しく去って行った。

2

時 場所 脱退劇後

事件

佐々木の名は出たとしても、裏切り者で片づけられた。

時 場所 障子を開け放つ

事件

弟子達は批判の言葉を叫ぶ。大声で罵り合った。

時 場所 モリさん

事件

この市で制作された絵画の本質を根本的に変革しようとしていた。

時 場所 「浮世」一絵の背景を成す夜の歓楽と酒の世界

事件

モリさんは知り合いの女の店、お茶屋、弓場に連れて行った。弟子達は格別のサービスを受けた。モリさんには芸能界（旅役者、踊り子、楽団）に多くの知人がいて別荘を訪れ弟子達と交情した。

時 場所 収納庫

事件

小野が中にいると、モリさんが入って来た。彼は昔なじみの義三郎をどう思うか尋ねる。ああいう人達の訪問が多過ぎる。これ程時間をかけてつき合うべきかと答える。

時 場所 二つの木版画 芸者のうしろ姿

事件

モリさんは細部にこだわり過ぎたのか、致命的な欠陥になっていると言うと、芸術家の才能がひとつの様式の限界をいかに超越できるか教えてくれると答える。

時 場所 木の櫃

事件

モリさんは腰を下ろして話をした。微妙で繊細な美は夕闇が訪れたあとの妓楼のなかに漂っている、あそこの版画にははかない幻想的なものが表現されていないと言う。浮世の風俗を賛美することに価値がある。

時 場所 先月 デパート 食堂 ランチ

事件

一郎はハウレンソウを食べてポパイのように強くなると言う。お酒を飲むと強くなるか聞くと強くなったような気分になると答える。

小野は八つの賢治に飲ませたことを思い出し一郎にお酒を飲めるようにしてやる。男なら少しはたしなんでもいいと言う。

時 場所 十五分位

事件

一郎は那口幸雄について尋ねる。大人達の話に目を傾けている。自殺したことを尋ねる。小野は歌を作った人で日本中で歌われた。戦後彼は歌は間違いだったと思った。お詫びに自殺した。犯した過ちを認めた。勇気ある立派な人だと説明した。

時 場所 昼食後 都心の店 三時過ぎ 桜橋通り喫茶店 和泉町新居

事件

歩いて新居に着いた。

時 場所 団地の一室 四階 小さな二間

事件

紀子はこの新居を自慢している。すべて洋式で便利で使いやすいと言う。

小野は一郎が酒を飲んでみたいと言っていたと言うと節子と紀子は反対する。節子はもう少し大きくなってからの方がいいと言う。夫もそう言うだろうと言う。

時 場所 一時間後 食事

事件

太郎は会社の同僚をカメさんと呼ぶようになった話をする。小野も同じニックネームをつけた同僚がいたと言う。太郎は小学校にもいた。どんなグループにもいるようだと言う。

小野は弟子の中では信太郎だと思ふ。カメさんたちは冒険をする気力がないので、人は消極性を軽蔑をすると思う。杉村明は壮大な破局を味わったが、彼らは非凡な業績をあげることとはない。

時 場所 モリさんの別荘 数年間

事件

小野がカメさんに与える援助に彼が感謝するなかで感情が育った。カメさんは冒険的なことを極端にためた。

時 場所 ある日の午後 古い調理場

事件

カメさんは今の絵に好奇心をそそられる。プライバシーを願い出ている。特別なものを見抜いていると言う。小野の絵にインスピレーションをうけてきた。カメさんはいつも新しい手法を試している。作品が小野やカメさんと並んで展示される日が来ないとも限らないと言う。

時 場所 数日後 朝 古い調理場 小野の未完成の絵

事件

カメさんはその絵を見て遊びかと尋ねる。遊びではない、重要な一步を踏み出したと答える。裏切り者と言って外へ行った。

時 場所 絵<独善>

事件

松田に連れられて街を歩いているとき見かけた小さな風景だ。

時 場所 西津留の鉄橋 夏の終わり

事件

鉄橋のまん中から見た眼下の光景。小さな人の姿がアリのように動き回っている。松田は掘っ建て小屋ばかりの貧民窟だ。政治家、実業家は見たとしても遠くから眺めるだけだと言う。臭気は強まり吐気を催すほどになってくる。

時 場所 抜け道

事件

三人の小さな男の子が小さな生き物をいじめていた。

時 場所 数日後

事件

三人の男の子を<独善>の中心的なイメージとして用いた。三人の子供上に豪華なバーで酒を飲み雑談している。三人の身なりのいい男たち、顔つきは退廃的だ。

アピール「ソレデモ若者ハ自己ノ尊厳ヲ守ルタメニ戦フ覚悟ヲ決メテイル」

時 場所 一九三十年代 <地平ヲ望メ>

事件

<独善>の改作。上半分立派な販売をした。三人の政治家の会談、下半分厳粛な顔つきの軍人に変っていた。日本刀を突き出し、西のアジア大陸に向かっている将校達。

メッセージ「空論ヲ重ネル時ニ非ズ。日本人今コソ前進スベシ」

事件

<独善>の改作。土半分立派な販装をした。三人の政治家の会談、下半分厳粛左顔つきの軍人に変っていた。日本刀を突き出し、西のアジア大陸に向かっている将校達。

メッセージ「空論ヲ重ネル時ニ非ズ。日本人今コソ前進スベシ」

時 場所 戦争中

事件

この市の多くの人がこの版画を見ている。

大いに賞賛された。

時 場所 数日後 夕方

事件

松田と中心街のバーに入った。下層階級の人々がよく利用している。暗く狭い店だ。

時 場所 奥の小部屋

事件

松田は画家は世界を知らずに退廃的だと批判する。小野は絵描きが世間知らずと言うのは当然と言う。絵で稼いだ金を持って貧困地区へ入っていくのは世間知らずだ。大規模な展覧会を定期的に行けばかなり救える。善意で貧困が救われるとみているなら節穴だ。慈善は退廃的な絵描きの目を開かせる。

貧しくなり飢え病気になる時代に画家が遊女の絵ばかり描いていいか。退廃的な画家が政治的革命を実施させるためどんな助けができるか。

松田は英国やフランスに劣らない大帝国を建設すべき、海外にもっと進出すべきだと言う。

時 場所 二、三週間後、古い調理場

事件

カメさんが度肝を抜かれた理由は、松田と議論した問題とは関係ない。モリさんの好みを見無視している。花柳界のおぼれげな行灯の先をとらえようとする画塾挙げての努力が無視されている。太い輪郭が用いられていることにショックを受けたのだ。

時 場所 その朝

事件

アイデアを隠しておけないと悟った。

時 場所 一週間後 午後 日暮れ 高見庭園あずまや

事件

戦時中に焼失するまでお気に入りの場所で開戦間近に才能ある弟子里田と最後の話した場所だ。モリさんは何か悩んでいると言ったが何だと言う。小野は作品の一部がなくなると答える。わしの手元にあると答えると絵が無事でよかったと言う。

若い画家は少しばかり実験を試してみるのも悪くない、最近の作品を二つか三つ別荘に帰ってから持って来いと言う。わしの庇護のもとから去った後でどうなるか考えたか。今後とも画家として育ててくださると期待していた。

小野は続けた。歓楽の世界をみつめること、そこにはない美しさを発見することを学んだ。享乐的なものより実体のあるものにきりかえること、いつまでも<人浮世の画家>でいることはできない。

本格的な画家としての道は絶たれると言う。教師の側の傲慢さと支配欲は遺憾千万だと黒田のことを思い出す。

時 場所 開戦前の冬 黒田の家 みずぼらしい小さな家 中町

事件

家の前に私服警官が立っていた。小野が尋ねると取り調べのため本署へ連行されたと答える。

時 場所 家の中散乱

事件

畳がはがされ、警官が床板を懐中電灯で調べている。

時 場所 裏手の縁側 たき火

事件

黒田について尋ねると、面倒をみるから心配するなと答える。絵を焼き続ける必要はなかった。優秀な作品もあった、委員会に誰かを派遣してもらえばと黒田のために助言しただけ

と弁明する。

4

時 場所 先月 数日の里帰り

事件

一郎は酒を注ぐ紀子をにらむ。小野は辛い気持ちで一郎の顔を見る。太郎はKNCの自慢をする。節子は素一も日本電気では有能な上役に恵まれていると言う。小野は戦前の経営者は一人も残っていない。アメリカ追従は急ぎ過ぎたと心配する。節子は四年間の混乱ののち未来への展望を持てるようになったと素一の話を紹介する。小野は前進が最後までであることを祈ると話す。太郎が一郎になにになりたいか聞くと、日本電機の社長と宣言し、みんながどっと笑った。

時 場所 夕食終わりかけ

事件

一郎がお酒全部終わったのと聞くと紀子は全部空っぽと答える。小野は一郎の落胆ぶりが分かる。

時 場所 一時間後 アパートの小さな空き部屋

事件

小野が酒なら大きくなっていくらでも飲めると言うと言まかせてくれなかったことを心配しなくてもいいと言う。急に大きくなったと言う。

時 場所 客間

事件

小野は太郎に博士と顔見知りになって十六年たつ、友達になれたのは一年だと言う。太郎はそんなものかもと答える。

小野はあの子の将来が頭痛の種だったが順調に運んでいる太郎も立派だと言う。節子も心配し始めたのがたった一年前だったなんてと喜ぶ。

紀子の幸せが過去の経歴によって妨げられないように手を打っておいたと言うと、紀子が手紙で、自分のことについて父の言葉にびっくりしたと書いていた。

悲惨な結果をもたらした目的のために影響力を行使したことは認めたいと言う。節子はひとりの画家に過ぎない。素晴らしい絵を描いたと励ます。

一九五〇年六月

時 場所 午前中

事件

松田の報せを受け取り、軽い食事をとって外へ出た。

時 場所 <ためらい橋>

事件

松田とは、紀子の縁談を進めている間久しぶりに再会した。

時 場所 ひと月あまり前

事件

衝動的に訪問した。死が近づいていることなど夢にも思わなかった。

時 場所 この日の午後 松田宅

事件

一年半前訪ねて以来殆ど来客はなかった。

時 場所 客間

事件

病氣中くれた手紙の礼を言う。松田は順調に回復したようだと行った。紀子は秋に出産する予定。節子に来月二人目が生まれる予定と報告する。

水彩画を少し描いていると言うと、絵筆を持っていると聞いて嬉しい。この前は絵をあきらめた感じだったと言う。長いこと絵筆に手を離れていると答える。松田が社会に壮大な貢献をしようと望んでいたと言うと君の目標も壮大だったと答える。松田は信念に従って行動し、全力を尽くし事に当たった。

時 場所 晩春の午後

事件

小野はものが焦げるにおいがすると空襲と火災を連想したと言うと松田は隣の家で庭掃除している証拠と答える。

時 場所 庭

事件

松田は将来、政治家、実業家はあんな目に遭わせたと言われ非難されている、おれたちのやることはたかがしれている。昔やったことを問題にする人間がなんてどこにもいないと言う。

時 場所 一九三八年 重田財団賞

事件

小野は授与された。重要な登竜門だった。<みぎひだり>で称えるスピーチに目を傾けた。

時 場所 一六年ぶり 若葉群

事件

歌麿の伝統に西欧の影響を取り入れようとするモリさんは愛国心に反すると評判が下がった。

時 場所 村の駅 春の午後 別荘

事件

モリさんとは同業者のように話そうと思う。

時 場所 雑草

事件

腰を下ろししみかんを食べる。勝利感と満足感がこみ上げる。

時 場所 小一時間

事件

座ったままで別荘に近づかない。心からの満足感を味わう。カメさん、信太郎は有能でも、すべてを賭けることが何を意味するか分からない。松田とは共通していた。

時 場所 <みぎひだり>

事件

ビルから出てくるサラリーマンは楽天的で情熱的だ。

時 場所 ベンチ

事件

市が復興し活気を取り戻しているのを見ているとより良い道を進むチャンスを与えられていると思う。

2 舞台

敗戦後三年経った一九四八年から一九五〇年三年間、ある市に展開する。

3 人物

(1) 小野益次

①画家

父の家は、鶴岡村にあった。商人で、高い箱を持ち、帳面をつけ、符丁を使い面倒な計算をした。傾きかけた家業を息子に継がせようと、十二才の時週一度客間に呼んで家業の話をした。父は理解すると期待していなかった。継がせようとしたがそれはできないことだと分かった。

益次は一瞬見たものをキャンバス上に再現する能力があった。瞬間残存能力で、画家に必須の能力だ。子供の頃にそれは発揮されていた。この能力で静止している者はそのまま正確に描写され、動くものは動きを止めて正確に描写された。彼は絵を描く能力を身につけて生まれ絵を描いた。

父は十六才の時、描いた絵を持ってこさせた。なかでも西山から下る道の絵を見事だと評価した。家に来た老修業僧は益次の才能を見抜いていたと話した。父は絵描きどもは、不潔な貧乏暮していると道を巡りながら誘惑に陥らない人もいと補足した。

益次は簿記、現金を扱うつもりはない。以前家業を継ぐことに怯えたが、退屈するようになった。小銭の勘定だ。家業を拒否し画家として立つ決意をする。野心に生きようとする。

一九一三年この市にやって来て、家賃の安い古川に住んだ。老夫人が独身の一人息子と暮している家の屋根裏部屋で不便だった。ランプの光で絵を描き、イーゼルを据える余地もなく、油が飛び散るのを防ぐこともできなかった。

天井は低く立ち上がれなかった。中腰で製作し垂木に頭をぶつけた。

武田公房に雇って貰い暮らしが立てられた。父の心配した通りの生活になったが絵描きの希望は達成できた。

日中は工房の会長の<アトリエ>で製作した。古い地にあった。食堂の2階にある長い一

室だった。十五人が一列にイーゼルを並べた。食堂に客が入ってくる夕方六時退出させられ各自の下宿で仕事を続けた。

夜まで仕事が続いたのは、短期間に多数の絵画を製作しなければならなかったからだ。期日が迫ると睡眠二、三時間に切り詰め描き続けた。会長は強い支配力で描かせた。工場で製作される製品のような絵だ。見た目の良さが売りで芸術性や感動はなかった。

画題は注文に応じて描く芸者、桜の花、池の鯉、寺院などだった。時に輸出先の外国人に日本人らしく見えることが重要だった。

やがて、小野の絵は森山誠治に認められる。工房の生活は食うためあくせく働く駄馬のようなものだ。会長は事業家で売れる作品を早く大量に描かせ売り利益をあげる。忠誠を誓う人に値しない。

森山は本物の芸術家、偉大な芸術家だ。彼はそのまま工房にいと才能に傷がつく、弟子にならないかと誘った。

小野は工房をやめ山荘に移る。絵を描いて生活する。生きるために絵を描いた。工房では物足りなかった。受ける絵を描いただけだ。作品とは言えない。食うためだけの絵ではない。生きるための生かすことのできる絵を描きたかった。

別荘は若葉群の高原にあった。小野はここに七年間いた。別荘は美しい外観だったが、中は荒れていた。十人の弟子がいた。モリさんは生活を支持、画材を提供し指導した。モリさんの絵の見事さに息を飲んだ。驚くべき革新的な技倆で描かれている。描きあがると弟子達を集め、作品の特徴を指摘し合わせた。

モリさんの画風は「現代の歌麿」と呼ばれていた。歌麿の伝統を現代化しようと意識的に努力していた。遊女や芸者の絵を得意としていた。女は後ろから見られている。女の表情より手に持っているものや着物で感情を表現した。ヨーロッパ風に光と影で立体効果を出した。女達のまわりにある種の愁いを帯びた夜の雰囲気を醸し出すことだった。画家が把えることのできる微妙で繊細な美的夕闇が訪れて後の妓楼の中に漂っているはかない幻想的な雰囲気を表現することだ。浮世の風俗を賛美することだ。

対象は遊女や芸者だ。男に媚を売る女を描く。彼女たちが男の気を引こうと話し振舞う。こういう女を上手に描く。男は女と触れ合い魅力を探る。モリさんは街に出て女を漁り、女を別荘に呼んで楽しむ。現実に交情を求めそれを描く。男女のもつれあいを探る、その中から得たものを描く。描くものはこれだけで他には何もない。ひたすら色情に生きる。『浮世の画家』はモリさんであって他の誰でもない。そして彼はこの中でのみ存在する。モリさんはこの市で製作された絵画の本質を根本的に変革しようとしていた。大目標をもって弟子を育成するため時間と富の大半を投げうった。弟子達は絵画の領域だけでなく価値観、生活様式に全面的に従っていた。

市内に歓楽と酒の世界を探訪し、旅役者や踊り子を招いて夜通し歌って踊って夜を明かした。

現実に色を求め、色を絵に描いた。これが別荘の絵画だ。モリさんは小野の画風の変化に

気づく。技量抜群で手塩にかけて才能を育ててきた弟子の離反に気づく。庇護のもとから去ったらどうなるか、本格的な画家の道は絶たれると脅かす。が、小野は既に武田公房で辛酸をなめているからその心配はない。また小野は離脱について、佐々木の失敗を知っているから適切に対処する。

小野は山荘の画家たちの色事が行き過ぎだと思う。これ程時間と金と体力をかけてつきあうべきか問う。町に出ること山荘に呼び寄せることで絵を描くとして、そういう絵しかないではないか。またそれ程の労力を必要とするものか。小野は山荘の絵の描き方とその絵に疑問を持つ。

歓楽の世界にはかない美しさを発見するより他の方向に向かう時にいる。享樂的なものより実体のあるものを描く<浮世の画家>でいることはできないと言う。

小野は松田との交流を通して現実に関心を向け社会的作品<独善>と<地平ヲ望メ>を描く。一九三四年代評判になり、戦争中もてはやされた。軍人が西のアジア大陸に侵略しようとする絵だ。

一九三八年五月重田財団賞を受賞する。小野は戦争鼓吹の絵を、男を太い輪郭で描き評価された。

モリさんは色彩を主にし、光と影で立体的感を出し、女を描き、雰囲気醸し出す絵を描き続けた。愛国心に反するものとみなされ、落ちぶれた。

戦後、戦争協力をしたと批判を受ける。小野は過去を直視する。世の中に悪影響を及ぼしたと認める。多くの過ちをしたことを認める。国にとって有害なことを国民に苦難をもたらしたと率直に認める。自分の絵にも教育の仕方にも責任はある。

当時は信念を持っていて、国民の役に立つと協力したことを、現在は間違っていたと認める。過ちを直視すれば満足感が得られ自尊心が高まる。

小野はその時代を精いっぱい生きてきた。そう振り返る。過ちであったと認識し反省し自らを責める。自責の任は強く、それを主張するので自分を苛めないようにとかばわれる。小野はその時代に真剣に向き合い生きた。いつもその時代に向き合い真剣に生きる。

戦後絵を止める。描かない。わずかに水彩に手を染める。一郎に絵はどこにあるか尋ねられ見たいと言われる。しまつてあると答える。戦前の絵を封印している。見せない、掲示しない。あの活動を反省し、自分に向き合い責め続ける。

平山は五才で幼児のようだ。悪気がない。戦前、軍歌を歌い愛国的演説をし名物男になった。注目され人気者になり金や食べ物をもたらした。人々は平山をはやし立てた。今、同じことをすると叩きのめされる。

信太郎は新設高校の教職に応募し採用願いを提出する。戦前、シナ事変を描いた絵が評価された。戦後、占領軍は戦時犯罪者、協力者を取り締まった。信太郎はこれを恐れ、小野に一筆釈明文を書いてほしいと頼む。

小野は国家存亡の危機でよくやった。作品を誇りにしろ、なぜ過去を直視しない。ポスターで名を挙げた、自分を偽る必要はないと注意する。小野は一貫した主張をする。

過ちを認められない、認めたくないことが恥ずかしい。自分の責任を回避しようとしている。状況に合わせ、戦前の活動を否認し、現在に寄り添って右往左往する節操のない人だ。

那口幸雄は知り合いではないが、知っている。歌は放送され広く歌われた。行進や戦争に出かける時、歌った。戦意を高揚させる歌を作り戦争遂行に尽くした。戦後、歌は否定される。戦争で亡くなった人々、親を亡くした子供たちのことを考えた。間違いを犯したと思ってお詫びするしかないと思自殺した。犯した過ちを認めた、勇気ある立派な人だと思う。

黒田は上町大学美術主任教授をしている。小野は大学へ行き住所と職歴を教えて貰う。何カ月も獄中生活をし、戦後釈放された。少人数相手の個人教授をしていた。作年初夏上町大学の職を得た。戦前弾圧を受けたが屈しなかった。一貫した生き方をし戦後職を得た。那口と対照的な生き方になる。

小野が黒田を尋ねると留守で円地という弟子が応対した。小野は円地の絵を高く評価する。小野は肩のことを知らない。看守は傷について知らず、敗戦まで治療を受けられなかった。何度も殴る蹴るを繰り返した。連中は国賊と呼んだと言う。円地は黒田は会いたくないだろうと言う。小野は後日会いたいと手紙を出す、会っても実りある話ができないと断りの手紙を受け取る。

開戦前の冬、黒田の家を尋ねると、私服と制服の警官がいた。黒田は本署に連行され庭で絵を焼いていた。

小野が官職をかさにきて迫っても将があかない。委員会に誰か派遣して注意したらいいと思っただけで、それがきっかけになり捜索を受けることになった。

黒田は帆船の絵を描き逮捕され拷問を受けた。屈せず敗戦になり釈放された。戦前、戦後一貫した態度で絵を描き続けた。小野を恨み、面会の呼びかけも拒否した。

中原康成は開戦二年前、中学校で美術を教えていた。謙虚で臆病で、描くのが遅くほかのもの半分以上しか描けずカメさんと呼ばれていた。二人にいじめられているところを小野は救った。小野は尊敬されていたのでできた。

森山山荘へ行くことを打ち明け誘う。モリさんは小野の才能を認めても、小野がカメさんの才能を同等と見ることは誤りだ。カメさんの才能は別で、思い込みに過ぎない。

カメさんは推薦してもらって工房に入った。数ヶ月で恩知らずなことはできないという。誠実な人だ。一年たっても見当違いの効果しか生まない色を使っていた。カメさんは小野の助けに感謝し友情を感じていた。相変わらず冒険的なことを極端にためらっていた。

小野の新しい試みに好奇心をそそられる。未完成の絵を重要な一歩だと言うと、モリさんの好みを無視している、裏切り者と非難した。カメさんは山荘レベルの絵の位置にいる。そういう絵を認め描く。誇りにしている。その上のレベルも下のレベルも理解ができない。いる所が絶対だ。異端を拒否する。小野についてきたが絵に限っては主張をまげない。

小野を評価してきたが、一歩前進する小野を理解できず、自分のレベルで拒否する。

松田知州は別荘に住んで六年位した頃やって来た。その時始めて会った。岡田信源協会に勤めている。戦前年一回展覧会を主催した。市の絵画と版画の登竜門と見なされていた。

松田は貧民窟に連れて行く。貧乏人は増えているというのに、政治家、実業家は目もくれずに批判する。

小野は松田の思想にひかれ会い続ける。別荘の連中の絵で稼いだ金を貧困地区へ持っていくのか、慈善で貧民が救われはしないと社会批判をする。一方で海外に侵出して大帝国を建設すべきだと侵略思想も述べる。

松田の社会思想に影響を受け、小野は思想を絵に表現する。貧民窟の三人の男の子をモデルに<独善><地平ヲ望メ>を描く。そして別荘を脱退し、独自の道を歩む。武田を拒否し森山を越え前進して行く。

松田は信念に従って行動し全力を尽くして事に当たった。二人がやったことを問題にする人間なんてどこにもいない。自信喪失なんかどこ吹く風という。

小野は松田のことを考え楽天的になる。二人には共通性がある。一生懸命取り組み反省し前へ進んできた。

②家族

妻道子は一か四人焼夷弾で戦死する。何人かいたのに一人だけ命を奪われる。益次は一人になり娘節子、紀子と暮らす。

一九三三年頃、暮らしは楽になっていくようで妻は新しい家を探してくれと言った。節子は十四、五才だった。

節子は三十才、内気で無口だった。器量がよくなく、いい相手が見つかるか心配していた。素一と結婚し一郎が生まれ容貌に気品が出て見栄えがよくなった。遠くにいる。

女の結婚を容貌で判断する時代だ。節子は二十二才で結婚した。紀子の縁談に注意を払う。紀子は二十六才で去年縁談が壊れた。女の結婚は年齢も問題になる。紀子の年齢は遅い。節子は相手側の調査に注意すべきだと言う。小野は意見に従い過去の知り合いを尋ね、便宜を図って貰う。身元調査があり、気にする。

紀子は子供好きでよく遊んでやる。あの年になって独身で可哀想と言う。結婚適齢期があり、目安にしてして結婚させる。

遠くにいるので小野と話す機会を作り楽しみにする。父は引退後少し弱気になっていると案じる。那口の過去と自分の過去を重ねているように見えた。彼の歌は戦意高揚のあらゆるレベルで役割を果たした。父は一人の画家に過ぎない。自殺しないように励ます。すばらしい絵を描いた。影響力を持った、大きな事柄とは関係ない。画家に過ぎない。節子は絵の評価をする。絵の戦勝に果たした役割を見てみたい。理解していない。絵は戦争と関係ないと思う。父の活躍を称え、社会的影響を考えない。父をかばう。那口の自殺を「気の毒」と感情的心情的にとらえる。父とは違うと思う。戦争犯罪に関する認識がない。平凡な家族を第一に思う主婦だ。

夫を思い話し合っている。夫の言ったことを受けとめている。夫は紀子の縁談の事を知り意見を述べる。戦争を理不尽と思っている。日本電気という大企業に勤めている。節子は夫と話し、意見を受け入れ勤め先を誇りに思っている。

紀子の夫の太郎も KNC という同業企業に勤めている。二人とも夫の仕事に誇りを持っている。紀子の破談した相手三宅二郎はみずばらしい会社に勤めている。劣等感から断った。結婚は夫の職業にも左右される。

食卓の片付けを手伝うように言われ、一郎は女の仕事と言う。酒は男の飲むものと思う。女は酒をこわがる。男尊女卑は家庭の中で形成されている。一郎は仕事と言われると手を貸そうとする。

絵に関心を持ち描いている。小野が有名な画家と知っていて見たいとねだる。教えてやると言われると真剣になる。

一郎は一人っ子で大人の中において大人の話に耳にし疑問を抱いて尋ねる。臆病で怪談映画を見られずレインコートをかぶる。後で、強がってあらすじを語る。映画を見に行けなくなっても事情を話されると聞き分ける。

ほうれんそうを食べて強くなるより酒を飲んで強くなると飲みたいと思う。小野が諭すと納得する。広く関心を持ち自己主張する。よくしつけられている。

節子は父を心配し娘の縁談に気を配り、夫を誇り子を育てる。気配りのできる母親だ。

紀子は芝居を演じていると思われている。破談になったのも妥当と言い張った。みんな笑ったが本当に恋愛だったかもしれない。改まった見合いを恋愛と片づける。後に断った男と会った話を平気でする。相手が結婚していてよかった。もっと美人を求めていたので自分が裏切ったかも知れないと思う。

女が自分を厳しく責める話をし、そういう人が尋ねられると、少しも厳しくない。朝食に間に合うように起きてこないと答え、場がくつろぐ。戦前、戦後の転換に苦しむ父の自責を理解できず、日常の言動で答える。

紀子はその場その場で思った通りに話す。考えること配慮することはない。自由奔放に話す。その軽い言い方は新たな展開をもたらす。小野の厳しい自責についてでなく、小野の日常のルーズさを答える。考えのないこの切り換えで場は明るくなる。紀子は咄嗟に言葉を状況に合わせて発言する。

庭の剪定を小野は考えながらしている。紀子は見た樹木そのものに見た目で判断し思った通りに発言する。

節子の夫素一は満州に出兵し、辛い目にあった。年配の者に恨みつらみを持っている。戦争を遂行し責任をとらない者を卑怯きわまりないと非難する。賢治の納骨式でいたたまれず腹立たしげに大股で歩み去る。

賢治はほかの兵と同じように名誉の戦死を遂げた。名誉の戦死を遂行させた者はこのうのと暮している。勇敢な若者は命を奪われ犯罪人はこのうのと生きている。

紀子の夫太郎は知的で責任感がある。落ち着いていて鄭重な態度をとる。見合いの席で紀子の気分をくつろがせる。小野の自責をなだめようとする。将来は明るいと思っている。

小野は節子の器量がよくなく、結婚相手が見つかるか心配する。紀子の相手の三宅が断ると一段格の高い家だからと思う。

信太郎の弟に推薦状を頼まれると本省の知り合いに書く。信太郎の支那事変の絵に対する心配を和らげる手紙を書いてやる。人脈豊富で権限があり役割は大きい。

紀子の二度目の縁談は齋藤博士の長男太郎になる。各門で名声を承知している人だ。乗り気だ。

財産、地位、名声、家柄にこだわる。それを介して問題を解決していく。して成果を挙げる。黒田の家に来た警官にだけは力をふるえなかったが、多くの場面で力を発揮する。それでいて、家柄に鷹揚だ。地位にこだわらない、財産、名声を自覚したことはない。世間の評価を気にかけないと、その都度断る。

小野は戦前の封建思想に戦後も生きている。戦後の民主主義思想を知っていても理解しえず実践できない。封建思想をひきずっている。だからこだわらないところとこだわるところで言い訳をしなくてはならない。

一般に思想の転換を図ることはできない。矛盾の中に生きるしかない。男尊女卑は戦後七十三年たった今でも厳然と存在する。積極的に変えようもしない。世界の男女格差で百四十か国中百二十位の低さだ。

小野は絵画においては戦前の絵を強く自責する。しかし生活においては戦後の思想の中戦前の思想を持ち込んで生きる。

一九八六年